

探究学習の現場から

地域そして世界の課題「海洋問題」に挑む

気仙沼には専門学校はあっても、大学はありません。よって6割を占める大学・短大進学者は高校卒業後、町を出ていきます。これまで生徒は、一度外に出てしまふと「戻ってきても何をすればいいのかわからない。だから好きだけど戻れない」という状態でした。われわれとしては、一度、この土

「海」を軸とした地域探究を通じて

気仙沼を「内」と「外」から

支え続ける人を育てる

第4回 宮城県気仙沼高校

▶設立:2005年 ▶種別:全日制・定時制/普通科/共学 ▶生徒数:1学年約240人
▶SGH指定校。防災教育や志教育、地方創生につながる学習、自主参加形式の英語学習など、多様な教育活動を展開
▶2019年度合格実績:国公立大は、東北大、岩手大、弘前大、山形大、宮城教育大、東京海洋大などに、42人合格。私大は、早稲田大、慶應大、東北学院大、東北工業大、東北福祉大などに延べ182人が合格



研究企画部(SGH主任)
鈴木 悠生

すずきゆうせい ●教職歴10年。同校に赴任して6年目。担当教科は理科。「生徒の未来に種をまく」がモットー。



▲(写真上)1年次の地域社会研究の中間発表の様子。大学教員からオンラインでアドバイスを受ける。(左下)情報収集にはタブレットPCを積極的に活用。(右下)校内の各所に研究成果をまとめたポスターを掲示。3年生のポスターは英文。

気仙沼高校の探究学習

内容	1年次は「地域社会研究」を実施。地域の「海」を素材として、多様な地域課題に理解を深める。2年次以降はそれぞれの興味に応じての個人研究。思考力、学び続ける意志、行動力等を育む。	
対象・期間・時数	・1年次は「総合的な探究の時間」と学校設定科目を活用(週2時間実施) ・2年次以降は類型によって異なる(週1~3時間)	体制 ・研究企画部が全体をデザインし、各学年団の教員が指導 ・大学教員や地元企業、NPO団体のサポートを受ける
テーマ例	※2020年度 創造類型2年のテーマ(一部抜粋) 「気仙沼の海水浴場の賑わいを持続させるには」「外国人と私たちの違いから見る気仙沼の魅力」「鳴き砂海岸の起源と生成」など	評価方法 ・研究内容は5段階のルーブリックで評価し、学習成績に反映 ・活動の事前事後で身に付いた力を自己評価

探究学習3年間の流れ(2、3年は創造類型の場合)

	1年次	2年次	3年次
科目名	「地域社会研究」 「総合的な探究の時間」	「課題研究I」	「課題研究II」
内容	・グループで研究を展開 ・地域課題を理解する「地域理解講座」を受講 ・レポートの書き方、ITツールや図書館の活用法を学ぶ ・地域企業や市役所、大学を訪問するフィールドワークに参加 ・中間発表会、学年発表会で研究成果を発表	・個人で研究を展開 ・シンキングツールや各種データの扱い方を学習 ・研究テーマを設定後、予備実験や大学の研究室訪問を実施 ・研究内容をまとめたポスターの作成・発表 ・論文の作成 ・校外の各種発表会、論文コンテストへの参加	

*学校資料を基に編集部で作成。

味があるテーマを掘り下げていくうちに、より大きな社会課題とのつながりが見えてくることもあるからです。

さらに、どのようなテーマであれ、探究活動で学んだシンキングツールの活用法や、情報収集の方法は将来、何らかの形で生きる場面が出てくるはず。その意味では、協力していただく大学の先生方には、専門分野の知見や研究の意義よりも、研究に対する基本的な姿勢、汎用的な手法を伝えていただくことを期待しています。

目先の大学進学だけでなくその先の未来を考える

今では探究活動をきっかけに、在学中に地元の課題について自分なりに考え、行動を起こす生徒は、3分の1にも上るようになりまし。地域住民との交流イベントの開催や、震災体験の語り部活動、台風19号被害地へのボランティア活動などを自主的に行っていきます。また、研究成果を地域の中学校で発表して中学生の

地を離れても、将来は戻って地域を支えることも選択肢に入れてほしい。もし戻らなくても、外から地域に貢献することを考えてほしいわけ。そこで地域課題について考え、行動させることで、何らかの形で気仙沼を支える人間を育てることになったのです。

入学後1年生全員がグループで取り組む探究学習「地域社会研究」の軸は、気仙沼とは切っても切れない「海」。海洋問題をどうするかは、気仙沼だけでなく、世界にとっても大きな課題です。ところが、「海」の問題は、今の生徒にとっては、あまり実感が湧かないものとなっています。そのため、研究を始める前段階で、生徒は市役所や地元企業、震災の復興支援に関わるNPO法人に話を聞いたたり、ワークショップに参加して、「海」について改めて体験することから始めます。

2学期からは防災・産業・人間・文化・自然の5領域から1つを選び、例えば海×防災の視点から「浸水地域に建物をつくるのはなぜか」などのテーマを決め、研究を進めます。連携先の企業や病院、観光施設などでのフィールドワークや、東北大学や東北工業大学、気仙沼にサテライトを持つ東京海洋大学などの先生からのアドバイ

大学への期待

べき論や押し付け合いではない
高大連携をしたい

お互いが「高校(大学)がまず〇〇すべき」と押し付け合っていると、なかなか前に進みません。メンツを捨てつつ気軽に声をかけ、見学したり意見を交換したりできる関係になりたいですね。また、大学生からのアドバイスも、生徒の刺激になるでしょう。学生・生徒の交流の機会を設けていただければと思います。

探究学習を手伝うなど、地域教育のサポートも行っています。これにより探究活動に関心を持つ中学生が本校に進学することで、今の取り組みをより深めるものができるのではないかと期待しています。

もちろん生徒本人の進路意識にも変化が表れました。高校から直接海外大学に進学する生徒、「東京の大学に進学し、地域の関係人口を増やすNPOをつくりたい」という生徒、1年次の地域社会研究のテーマを自主的に研究し続け、その活動が評価され医学部に進学した生徒など、大学進学という「今」ではなく、その先の未来を考えて進路を選ぶ生徒が現れてきています。生徒には活動を通じて得た多様な力を、ぜひ自分と気仙沼の将来に生かしてもらいたいと思っています。

スなどを基に研究成果をまとめ、11月の中間発表を経て1月には研究成果を発表します。

2年次以降は希望進路に応じて人文、理数、そして文理融合人材育成をめざして設置した創造の3類型にクラスが分かれ、自分自身の問いを深める個人研究に移ります。人文・理数類型の生徒は自分の興味に基づいて自由にテーマを設定します。他方、探究学習を教育の柱に据えた創造類型の生徒は、さらにグローバル課題としての「海」の探究に取り組みます。

気仙沼と比較研究しやすい台湾での研修にも参加し、最終的に英語で論文をまとめます。中には校外のコンテストに参加する者もあり、前年度は、全国高校生マイプロジェクトアワードで、気仙沼の関係人口を増やすことを目的としたゲームを開発した生徒が、文部科学大臣賞を受賞しました。

このように最初は目の前の「海」から始め、徐々にフィールドを広げたり、自分の興味関心にフォーカスしたりして探究を進めていきます。この活動が大学での学びにつながることを期待してはいますが、結びつかなくても構いません。実際に取り組んでみて「大学で学びたいテーマではない」と気づくことも無駄ではありませんし、興